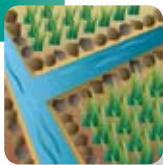


第3章 紀州徳川家の時代



大畑才蔵



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
	昭和(戦後)・平成時代

藩の期待にこたえた才蔵

17世紀の終わりごろ、財政難に苦しんでいた紀州^{はん}藩は、年貢^{ねんぐ}の増収をはかるため、米の取れ高を多くしようとした。そのため、農村で活躍^{かつやく}している経験豊かな農民を藩の役人に加え、その知識をいかそうとした。こうして藩の役人の目にとまった1人が大畑才蔵です。

1642(寛永19)年に今の橋本市学文路^{かむろ}で生まれた才蔵は、子どものころから読み書きや計算に親しむ機会に恵まれ、その力がしっかり育っていきました。そして才蔵は、18歳という若さで、伊都郡中組の大庄屋平野作太夫^{しやうや さくだゆう}のもとで補佐役^{ほさ}である、杖突^{つえつき}という役に任命され、おもに測量にたずさわりました。そののち才蔵は、しだいに村の政治にも深くかわり、庄屋^{しやうや}になりました。また土木工事もおこなって、その知識を身に付けるだけではなく、収入を増やす農業の仕方や、農民の暮らしを向上させる考えを持つようになり、その実力がしだいに藩の役人に知られるようになりました。

才蔵が藩の下級役人に採用されたのは、彼が55歳という高齢^{こうれい}のときでした。藩内各地のようすを調べて、米の取れ高を増やすことが可能な土地を探し、それを実現する方法を考えるよう命じられると、才蔵は、今までの知識と経験をいかそうと、全力で取り組みました。

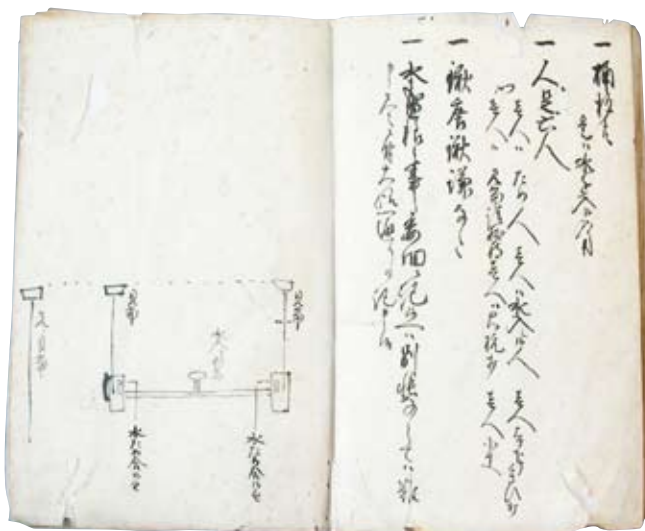
水盛台の考案

調査を通して才蔵は、灌漑用水^{かんがい}が足りない土地へ、大きな川から用水路をどのようにして導くかを考えました。そして水盛台^{みずもりだい}という土地の高さを測る道具を考案しました。

水盛台で用水路を通す地形^{かたむ}の傾きを測ってその位置を決め、場所により掘り出す土と積み上げる土の量を、工事の区割りごとに計算して、作業に必要な材料と人数及びその費用を見積りました。また工事の開始から完成までの日数も細かく計算して、計画書を役人に提出しました。

才蔵が手がけた最初の大がかりな工事は、紀州藩領であった伊勢国^{いせ}の、雲出川^{くもずがわ}から水を取り入れる「新井^{しんゆ}」と呼ぶ用水路でした。

工事の許しが藩から出ると、1698(元禄11)年、雨が少ない冬の時期に、工事区間をいくつかに分けて、同時着工の方法を取り入れ、農民たちを雇^{やと}って短い日数で計画どおり工事を完成させたので、新しい工法として人々を驚かせました。



水盛台の図(個人蔵)

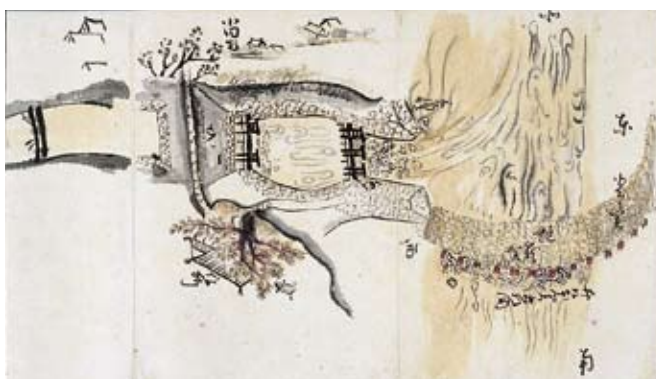
この工事で大きな自信をつけた才蔵は、紀ノ川北側の平地で米の増産をめざす紀州藩の期待にこたえようと、「新井」ができた翌年^{よくねん}に「藤崎井」の工事をはじめ、約半年でやり遂げました。

小田井の大雨

その後しばらく紀ノ川流域の工事から遠ざかっていた才蔵は、藩から「小田井」施工^{おだい せこう}の指示が出たので、1707（宝永4）年工事に取りかかりました。年は66歳になっていました。背山^{せのやま}付近より東

方は段丘^{だんきゅう}の出入が多いので、段丘の等高線^{せうこうせん}に沿って用水路を掘る必要がありました。また用水路へ入り込む地下水を防ぐため、水路底の粘土下に砂を敷きつめるなどの工夫をしました。「小田井」と交叉する嵯峨谷川^{さあががわ}などでは、川の底に用水路を通して水を送る一方、用水路が下流になるほど水量が減るので、名手川との交叉点では平面交差として、その川の水を「小田井」へ入れる方法も取り入れました。また穴伏川をまたぐ水路は高い位置に掛けるため、木組みの掛樋^{かけとい}を考え出すなど、その土地に応じていろいろな工夫をこらしました。

その後二期・三期工事と続き、長さ30数km、約910ha（明治16年調べ）を灌漑する用水路が出来上がりましたが、才蔵はその完成を見ることなく、1720（享保5）年79歳の生涯^{しょうがい}を閉じました。



「小田井樋」(個人蔵)
小田井の取水口の水門と谷川をわたる樋が描かれています。



わかやまの知識



【農業営みの手引書 地方の聞書】

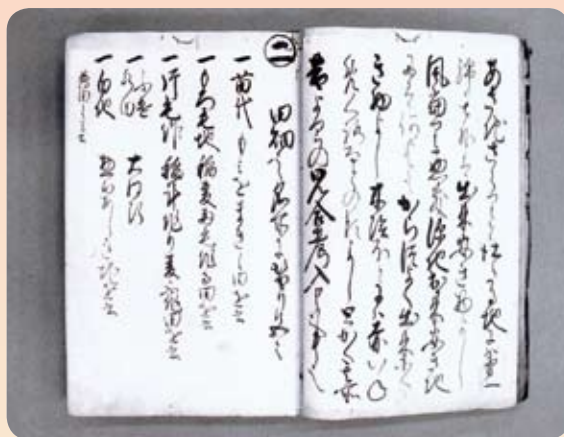
才蔵は、土木工事をするにあたっての考え方を説明した書物を数多く書き残しています。それ以外にも農業の仕方について記した書物もあります。なかでも有名なものが、「地方の聞書」です。

地方とは農村のことですが、広い意味では農業^{いとな}の営み方という意味も含んでいます。この本では、まず土地の良し悪しが作物の取れ高を左右すると、例を上げて説明

しています。また、豆・茄子・西瓜などの種をまく時期や手入れの仕方について解説し、種まきはその土地で目印になる木の芽が出る日などを見て、決めるがよいと教えています。当時の農業の営み方や作物の育て方がよくわかるとともに、現在にも通用する考え方に感心させられます。

そこでは、農民が農業をするために必要な費用を計算し、3年に1回の不作を予想して、日々節約すると同時に働き方の工夫が大切であると教えています。そのほか、稲の育ちの調べ方や年貢の取り立て及び工事の仕方など、村役人の心得まで書いています。

才蔵はこの本のはじめで、「親が教えてくれたことを子孫に伝え、家が栄えるようにと願って、見聞きしたことを書き集めた」と書いていますが、当時の多くの百姓にとっても、大切な手引書であったと言えるでしょう。



地方の聞書

* 1 一期工事では、名手川を小田井の排水と取水を兼ねたが、現在は川底を通水している。